平成28年度夏期研修レポート

「『子どもはみんな問題児。』を読んで」

和田　恵莉子

　今回『子どもはみんな問題児。』を読んで、共感することや改めて気づかされることがたくさんあった。読みながら子どもたちの姿や自分の子どもたちへのかかわり方を重ね、見直したり考えさせられることもあった。

　日々の保育の中でケンカがあったりトラブルが起こったりすることはよくあり、どのように解決するべきなのか頭を悩ませることもよくある。その日が楽しかったと思えるようにしなければならないが、なかなかできていないこともあったな、と自分の至らなさを反省した。でも、それによって子どもたちも私自身も成長していけるのだと思い、今まで以上に子どもたちに負けないエネルギーを持ってかかわっていかなくてはならないなと改めて感じた。また、遊びの大切さも改めて考えさせられた。遊びは子どもたちの成長の基となっていくものであり、遊びの中で沢山のことを学んでいく。保育者として子どもたちの遊びをいい方向にもっていけるようサポートしていくことが大切だが、振り返ってみるとかかわりすぎてしまうこともある。無神経に踏み込みすぎないようにしなければ、と思う。また、日々の保育の中でなかなか満足に遊びの時間をとることができない日もあるのでもっと工夫をして考え、遊びの時間を増やしていき、遊ぶ楽しさを存分に味わえるようにしていきたい。

子どもたちの遊びを見ていると、想像力の豊かさに驚かされることもよくある。子ども同士の会話に耳を傾けるとつい笑ってしまうようなこともある。そんな子どもたちの想像力をさらに発揮できるようにするためにも遊びや絵本の読み聞かせをもっと大切にしていきたいと改めて感じた。子どもたちの生きる力となる絵本を選び、読んでいきたい。また、保育中の読み聞かせでは子どもたちの顔を見ながら読むように心がけているが、一人ひとりの表情や反応が違いその子らしさが出ている。それで得た発見を子どもたちとかかわる保育のなかで役立てていきたい。入園進級当初、泣いている子に対して膝にのせて1対1で読み聞かせをすることがある。するとすぐに泣き止み、次はこれ読んで、と絵本を持ってくる姿がみられることもある。泣いて不安だった空間が安心できる空間になってくるきっかけになっているのだと感じた。

今回、『子どもはみんな問題児。』を読んで、改めて毎日を振り返るいい機会になった。子どもたちに幸せな時間を与え、共有できるようにしていきたい。「先生にはよく叱られたけれど、かわいがってもらって自信がついたの」という言葉があったが、子どもたちに愛情をもってかかわっていることを実感してもらえるようにし、その安心感の中で成長していけるように保育していきたい。日々の保育の中で毎日に追われていてつい忘れてしまう大切なこと思い出すためにも時々この本を読んで自分の保育や子どもたちの姿をじっくりと考え直すことをしていきたい。